

南塚信吾・古田元夫・加納格・奥村哲著  
『人びとの社会主義』（研究会「戦後派第一世代の歴史研究者は 21 世紀に何をなすべきか」編『21 世紀歴史学の創造』第 5 巻）  
有志舎（2013 年 6 月、390 頁）

池田 嘉郎

はじめに、本書が題名に掲げる「社会主義」という言葉のもつ輝きが失せて久しいことを確認しておきたい。この言葉のかつての訴求力と今日との落差について強調するのは、その魅力が強力であった頃の枠組みが、油断すると私たちの認識になお影響を及ぼすからである。端的に言えば、本書「はしがき」に見られる「思想から運動へ、そしてさらに権力を持つ体制となって」（vii）という枠組みがそれである。「思想・運動・体制」というこのお決まりの三位一体は、もうやめた方がよいのではなかろうか。第一にこの定式は、三要素のそれぞれが多様な様態をもつにもかかわらず、それら全てを「社会主義」という、アприオリに想定され、三要素の歴史的多様性から抽出されたものではない範疇のもとにまとめあげるものだからである。第二に、どれほど三要素の相対的な独立を強調しても、思想→運動→体制という一面的な発展段階論が下敷きになっているからである。第三に、この定式はそもそも当の社会主義政権（まずはソ連）自身の世界観が投影されたものであり、思想・運動・体制という三要素の設定自体がそうした世界観の産物だからである<sup>1</sup>。

もとより本書の著者の幾人かは、この定式がもつ制約性に恐らく気がついている。「総論 世界史の中の社会主義」（南塚信吾・古田元夫）で、「今日改めて社会主義を、横軸＝地域的広がり、縦軸＝時代的变化、中軸＝人間の社会的意識の発展、という三軸を込めた世界史の中で、考えることができるようになったのではないか」（25）とあるのはそのためであろう。このうち横軸と縦軸については同感である。他方、中軸の「人間の社会的意識の発展」は、これだけでは分かりにくい。もし時代や地域を越えた「社会主義」（ないし社会的公

正）の希求を想定しているのであれば、「思想・運動・体制」の再版の域を出ないのではないだろうか。

ここまで述べてきたことから、私が地域や時代ごとの個別事象のみを分析すべきだと考えているように見えるかもしれないが、そうではない。個別事象を抽象化して大きな枠組みを提起することは、本巻を含む『21 世紀歴史学の創造』シリーズがその批判的継承を意識している、戦後歴史学の大事な遺産である<sup>2</sup>。だが、そうした抽象化のためには、当の社会主義国家が発信する世界観にとられることなく、自分自身の歴史像をうちたてなければならない。

以下、各章について見てみたい。「第 1 部 ロシアの社会主義」（加納格）は、帝政史研究者の手になるソ連史である。帝政期とソ連期の分断を乗り越えようとする加納の姿勢に、まず共感する。ソ連期になってから生じたように見える問題のうちにも、帝政期にすでに見られた構造的なものが少なくないからである。とりわけ「権力の分割・分立による絶対主義権力の改革」と「広大な多民族国家の統合」という二つの点が、「帝政期を越えて 20 世紀末に至るまでの歴史的課題となる」（40）という指摘は正当である。より具体的にも、臨時政府の国制構想（61-62）や、ゴルバチョフによるロシア帝国の多元的統合への評価（119）に着目したことには、国制史家加納のよさがよく出ている。ヴィッテの工業化政策と一国社会主義路線の共通性が述べられているのも適切である（82）。

他方、社会主義論として見るならば、いくつかの点で不満が残ることもたしかである。第一に、国家構造に関わる上記二つの論点（権力問題と多民族国家）は、社会主義という本書のテーマとど

<sup>1</sup> たとえば、『大ソヴィエト百科事典』の「社会主義」の項を見よ。Социализм // Большая Советская Энциклопедия. 3-е изд. Т. 24. Кн. 1. (Советская энциклопедия, М.: 1976).

<sup>2</sup> 戦後歴史学に関する私の理解は、池田嘉郎「ロシア史研究の中の戦後歴史学—和田春樹と田中陽児の仕事を中心に」『史潮』73 号、2013 年 7 月、参照。

のように関わるのかが、必ずしも明確ではない。たしかに、帝政期とソ連期を貫通する国家構造上の問題と、社会主義の関係について、次のような説明が与えられてはいる。「ロシアの社会主義は、絶対主義皇帝専制と上からの近代化に対抗する運動として始まった。体制改革の試みが挫折したので社会主義は民主化、経済近代化、国内植民地を含む多民族・エスニシティ統合が課題となった。したがってそれは、当初からヨーロッパ近代が得た環境・条件を持たないところで始まった。個人の活動の自由が保障される市民社会は成立せず、社会運動の合法的条件も存在しなかったのである」

(129)。だがこれは、遅れたロシアでは社会主義は歪んだものとならざるを得なかった（逆に市民社会が成立していた西欧であれば、本来の形で社会主義が実現していたはずだ）、という古い議論の繰り返しのように見える。私見では論理は逆になるべきではなかろうか。つまり、私的所有権が制度的に保障され、社会の各部分の利害を代表し調整するものとしての政党制および議会制が安定的に機能している社会（典型的には19世紀西欧）では、そもそも公有制を標榜し、利害調整機関としての議会を否定するような体制が成立する余地はかなり狭いのである。

第二の不満は、加納が叙述する近現代ロシア史は、ハンガリーであれ中国であれベトナムであれ、それ以外の社会主義体制とどのように関係しているのかが不明な点である。国際的契機が基本的に考察対象に入っていない(34)ことは、世界史の中で社会主義を再考しようとする本書の趣旨からすれば、惜しまれることである。無論、各地域の「社会主義」なるものは個別の現象であり、総合的に考察することは不可能である、という立場もありうるわけではあるが。

第三に、帝政期については最新の研究動向が摂取されているのにひきかえ、ソ連期についてはそうではないことである。これは元来の専門から言ってやむを得ないことではあるのだが、1930年代末から叙述が一気に1953年のスターリンの死まで飛ぶのは問題である。近年の研究史に照らせば、1930年代前半に成し遂げられた農業集団化や重工業建設といった経済面での変容にくわえて、同じく1930年代前半からスターリンの死までの期間に展開した、ソヴィエト的アイデンティティの

形成（公民意識においても、エスニック・アイデンティティにおいても）が、ソ連文明の確立には重要だったからである。

ソヴィエト的アイデンティティの形成について視野に入れながら、ソ連と他地域の社会主義の関係について考えるならば、次のことが言えるだろう。ソ連社会主義は他の諸地域にモデルを提供したが、それは単に開発独裁的な面のみならず、人間の主体のあり方にも関わっていた。社会主義という名のもとでソ連が提供したのは、世界戦争の時代（和田春樹）<sup>3</sup>における従属地域のための短期促成型の「近代化パッケージ」と呼びうるものである。その中身は、1. 住民の政治的主体化。2. 従来は政治から排除されていた広範な民衆層のナショナルな統合。これは、地域や職業や身分やエスニシティの違いを越えて、単一の政治共同体への帰属意識を涵養するということである<sup>4</sup>。3. 市場原理の迂回。リソースの集中的配分のために加えて、そもそも市場経済を安定的に機能させるためにはインフラ整備にかなりの時間を要するからである。4. 団体の利用／創造。市場経済がないところで社会を統合するためには、従来からの団体（たとえば村落共同体）を活用するのが有効である。もしそうした制度の要素が弱い社会（たとえば中国）であれば、疑似共同体的に上からつくられる<sup>5</sup>。なお、共産党の位置をどう考えるかは社会主義を理解する上で決定的に重要な問題であるが、私は共産党の自己規定を重視して、あえて団体の一つとして考えてみたい。5. 統合の方向付けとしての普遍主義的イデオロギー。実際には、20世紀初頭の世界においてヘゲモニーを掌握していたヨーロッパ地域の経験とイデオロギーから抽出される。具体的には、直線的時間軸に沿った発展段階論と、「人間の解放」という表現に集約可能な社会正義観（土着の公正観念と融合する）である。

このパッケージが意味をもつのは、19世紀西欧的意味での近代（私的所有権、ブルジョア社会、ネーション、議会制）が十分な姿をとらないうち

<sup>3</sup> 同概念は、和田春樹『歴史としての社会主義』（岩波新書、1992年）のもの。

<sup>4</sup> 広範な住民を政治的に主体化することは、地元の言葉や習俗を媒介とするから、ナショナルな統合と個々のエスニック・アイデンティティの尊重は矛盾しない。

<sup>5</sup> この中国理解は、奥村哲『中国の現代史—戦争と社会主義』（青木書店、1999年）から学んだ。

に、1870年代以降のグローバル化に周縁として組み込まれた地域である。短期促成型となるのは、そうしなければ従属化が深まるばかりだからである。社会主義体制が自生的に成立したロシア、モンゴル、ユーゴスラヴィア、中国、北朝鮮、インドシナ、キューバがそうした地域にあたる。東欧はソ連圏への強制的編入なので、事情は異なる。

この社会主義像を踏まえつつ、次に「第3部 東欧における社会主義と農民—ハンガリー・オロシュハーザの歴史的経験」(南塚信吾)について見たい。18世紀初めから20世紀末までの長い期間の中で、南塚はハンガリー南部オロシュハーザ市の社会主義経験の歴史的意味を考えている。それは、21世紀に入ったのち、現地の元協同組合員が「1970年代の社会主義時代の農業と農村社会は「輝ける時代」だった」(222)と振り返るような経験である。南塚の結論は明快である。「とにかく、社会主義のもとで、圧倒的に多くの住民の生活が向上したことは否定できない。「300万人の乞食」はなくなったのである。社会主義体制が社会主義の「理念」を守った、それを裏切ったかという問題ではない」(308)。社会主義体制成立までのハンガリーにおける貧困や社会格差を直視し、社会主義のもとでの生活改善を高く評価する南塚の姿勢は、進歩概念に寄り添う戦後歴史的観点を本書中では最も直截に引き継いでいると言えるだろう。

だが、貧困や格差といった問題に正面から取り組む姿勢には共感しつつも、新自由主義に照らして第二次世界大戦後のハンガリー農村における社会主義の意義を評価することは、対象の十分な歴史化を妨げるものではないか、との懸念を覚える。第一に、南塚は「オロシュハーザに社会主義を導入した人びと(共産党員に限らない)は、オロシュハーザの長い歴史のなかで貯えられてきた歴史文化というべきものを背負って、自分たちの生活を向上させようと運動していたのではないか」として、社会主義が「歴史的蓄積の成果として成立し機能した」ことを重視する(223)。この指摘自体は頷けるのだが、かつてハンガリー農村を舞台として展開した様々な社会改革の思潮や運動は、社会主義体制成立後には物質的な改善という一側面のみに、あまりにも狭く切り詰められてしまったのではないだろうか。そのことはとくに、村外区である散村(タニャ)地域について感じられる

ことである。南塚の前著では、「農村探索者」エルデイがタニャを介して都市と農村を有機的に結合させる、一種の田園都市論を展開したことが生き生きと描かれていた<sup>6</sup>。もとよりエルデイのこの思想は同時代人には共有されなかったのであるが、それにしても本書における1970年代の「タニャ世界の変化」に関する叙述(287-289)は、農村を舞台とした戦前の半ばユートピア的な諸々の理念が、およそ死に絶えてしまったことを推察させるのである。

第二に、「輝ける時代」として振り返られる1970年代のハンガリー農村は、あくまでより大きなシステムの中の一部であった。ここで問題にしたのは党による言論統制などではなく、ハンガリー一国の社会主義体制、さらには東欧全体のコメコン体制が閉じられた経済圏をなしており、南塚が指摘するように、その内部での分業関係にハンガリー農村が依存していたという事実である(289)。この閉鎖系が持続可能な性質を備えていたのであれば、グローバル市場に対する防波堤となり続けていたのかもしれない(ビルマがそうであったことについて、総論(20)に指摘がある)。だが、周知のように1970年代以降の東欧は、デタントを背景にして西ヨーロッパから流れ込む融資に助けられて、経済成長を支えていたのである。したがって、ぬるま湯的環境を保ってくれるコメコンの防波堤は、決して持続可能な安定性を備えたものではなかった。この点について、1980年代後半における世界銀行の融資についてごくわずかに触れられている(304)だけであるのは、元来国際経済システムに目配りのきいている南塚にしては、バランスを欠いていると言えよう。

「第2部 毛沢東主義の意識構造と冷戦」(奥村哲)は、加納・南塚とは異なり、より限定された時期を扱い、対象も指導者の冷戦認識に限定されている。しかしこのことにより、奥村は中国社会主義の全体像をかえって明確に描き出すことに成功している。それは奥村には、「要するに社会主義改造とは、日中戦争から開始され国共内戦によって進んだ政治・経済・社会の国家による一元的掌握という流れが、朝鮮戦争を契機にさらに急激に進展したものを、将来大規模な戦争が起こりうる

<sup>6</sup> 南塚信吾『静かな革命—ハンガリーの農民と人民主義』(東京大学出版会、1987年)。

という国際情勢認識の下で、マルクス主義イデオロギーをスターリン的に解釈することによって、意識的に全面化しようとしたものに他ならない」

(152)という明快な中国社会主義の歴史的把握があり、さらにそれは奥村のこれまでの仕事における「社会主義体制の歴史的的位置」に関する大きな議論によって支えられているからである。

奥村の叙述からは、アメリカ合衆国を主要な敵として築かれた総力戦体制こそが毛沢東の社会主義であったことが、説得力をもって浮かび上がる。このことに関して、私は基本的に異論はない。ではその体制は、ソ連と比較したときどのような違いをもっていたのであろうか。奥村は和田春樹『歴史としての社会主義』への基本的には好意的な書評の中で、ソ連と中国の歴史的前提の違いを和田が考慮していないことを批判している<sup>7</sup>。私はこの批判は正しいと思う。もう一点、奥村が触れていない相違について記すと、中国の社会主義体制は、ソ連がそうであったよりもいっそう、状況によって規定されていた側面が強かったのではないだろうか。ソ連も第一次世界大戦および内戦という総力戦体制の中から生まれてきたことには変わりがないのだが、第二次世界大戦に勝利してからは（アメリカの強力なプレッシャーにさらされつつも）基本的には二つだけの超大国の一つとして主体的に振舞うことができた。それに対して中国社会主義体制は、アメリカとソ連という両方の超大国を相手にして、きわどい駆け引きを続けなければならなかった。その構造や政策が外的条件に強く規定されているということは、かえってそうした条件が変わったときには、相対的に速やかに総力戦体制の緩和に向けて動けるということだったのではないだろうか。アメリカがベトナム侵略戦争に敗北して（ソ連は冷戦の敗者だが、ベトナムは冷戦の勝者と言ってよいのではなかろうか）、東アジアの国際環境が大きく変わろうとしたときに、ソ連と中国とで進む道が分かれていったのは、このようにして説明できるのではないだろうか。

「第4部 ベトナムにおける社会主義とムラードイモイ時代の北部・中部農村と集団農業経験」（古田元夫）にも、奥村論文と同じことが言える。限定された時期と対照を扱っているが、独自の理

論的枠組みをもっているために、かえってベトナム社会主義体制の特徴が見えやすいのである。中国と異なり村落共同体が強かったベトナムでは、総力戦体制の構築に際しても農村の利害や、従来からの共同体意識が少なからぬ影響を及ぼした。だが、そのことがもたらしたものは「ムラの伝統が社会主義を飲み込んだ」というよりも、「社会主義がムラの伝統を内在化した」（317）ということである<sup>8</sup>。したがって、集団農業の解体後の動きも、「単なる「ムラ」の復活ではなく、合作社という体験を経過し、それによって強化された側面がある、「ムラ」的な平等主義の発揮と理解されるべきだ」（345）という。古いものの上に新しいものが積み重なることで、古いものと新しいものの双方が変化して次の段階に引き上げられる。古田のこの説明は弁証法の最良の見本である。ここには、エスニシティであれ「地域」であれ生活空間を、人々が主体的に他者との関係を構築する可変的な場として捉える古田の方法論—1960年代以降の歴史学研究会での「地域」をめぐる議論を引き継いでいる—がよく生かされている。

総じて本書からは、社会主義を歴史化する際の独特の難しさが浮かび上がるが、それとともにまた、それを克服する方法も示されているように思われる。社会主義を歴史化するのが難しいのは、それが進歩概念を媒介として、歴史学自身がその一部であるところの近代と骨がらみになってしまっているからである。そしてまた、社会正義という、人間の情念に関わる問題とも密接に結びついてしまっているからである。私たちは、国制史や世界システム論的観点を用いることによって、近代（社会主義を含む）の相対化をまずは行なうことができる。しかし、情念の問題を迂回してしまえば、社会主義の歴史的位置をなお捉え損なうであろう。情念を脱色するのではなく、それがよってたつ根拠を歴史的・構造的に明らかにする必要がある。そのためには、生活空間（とりわけ共同体）と国際関係（とりわけ戦争）の相互連関を理解することが、ひとつの鍵となる。本書の中で、奥村と古田の議論がとくに成功しているように思

<sup>7</sup> 奥村哲「和田春樹『歴史としての社会主義』をめぐって」『人民の歴史学』115号、1993年3月。

<sup>8</sup> 農村的伝統による公権力の同化という溪内謙のテーゼの妥当性を評価する上でも、示唆に富む議論である。溪内謙『スターリン政治体制の成立』（全4巻）（岩波書店、1970年—1986年）。

われるのは、この点を突いているからに他ならない。

(いけだ よしろう・東京大学大学院人文社会系研究科)